

エルヴィス・コステロ & アラン・トゥーサン Elvis Costello & Allen Toussaint



ニューオーリンズよ蘇れ！

全世界に先駆け日本で先行発売されたニューオーリンズを襲ったハリケーン「カトリーナ」のレクイエムとして立ち上げた世紀のプロジェクト、エルヴィス・コステロとアラン・トゥーサン入魂のコラボレーション・アルバム『ザ・リヴァース・イン・リヴァース』発売記念として、5月31日(水)、東京・キリスト品川教会「GLORIA CHAREL」にて、来日スペシャルショーケースが行われた！ (取材・文:加瀬正之)

昨年8月29日、ハリケーン「カトリーナ」が米ルイジアナ州を直撃。ジャズ発祥の地ニューオーリンズは大打撃を受けた。その直後の9月17日に、ニューオーリンズ出身のジャズ・トランペッター、ウィントン・マルサリスの呼びかけで、チャリティ・コンサート『Higher Ground』がニューヨークで開催され、そのステージでエルヴィス・コステロとアラン・トゥーサンによる久々の共演が実現。今回のアルバムにも収録されているナンバー「フリーダム・フォー・ザ・スタリオン」を披露した。

そもそもこの2人の共演は、オノ・ヨーコの曲をカバーする企画アルバム『エヴリ・マン・ハズ・ア・ウーマン』でエルヴィスが披露した「ウォーキング・オン・シン・アイス」をアランがプロデュースした1983年に遡る。その後、89年にはエルヴィスの傑作アルバム『スパイク』に収録の「ディーブ・ダーク・トゥールスフル・ミラー」でアランがピアノを披露するなど、長年に渡り交流を温めていた。

昨年のニューヨークの会場で意気投合した2人は、早速今回の共演作の制作に取り掛かる。そして、今年に入り、2月に行われた「ロックンロール・ホール・オブ・フェイム」～「グラミー賞」のパフォーマンス。4月28日からニューオーリンズで開催された『ニューオーリンズ・ジャズ・アンド・ヘリテッジ・フェスティバル』のステージにも登場し、再び大反響を巻き起こした。そんな2人がこの度日本の地に降り立ったのだ。

司会は何とピーター・バラカン！ 事前に予告されていた日本人トップ・アーティストのスペシャル・サプライズは中島美嘉！！せいぜい300~400人程のキャパシティが限度の教会でのイベント。しかも、手を伸ばせば届きそうな至近距離でこの2人のパフォーマンスが拝めるなんて、贅沢この上ない体験だった。(インタビュー&ライブの様子はP6~7に続く)

【エルヴィス・コステロは、今年2月11日・12日に「昭和女子大学人見記念講堂」にて予定され延期となっていた来日公演の振替公演として、6月2日(金)に「東京国際フォーラムホールA」でコンサートを行った。2部構成でフル・オーケストラと共演するなど、たった一度のこの来日コンサートでも素晴らしいパフォーマンスを魅せてくれた。】

Elvis Costello

1954年8月25日、ロンドン近郊のパディントンにあるセント・マリー病院で産声をあげる。本名はデクラン・バトリック・マクマナス。エルヴィス・プレスリーと母親の旧姓アボット・コストロから取って、エルヴィス・コストロの芸名で、1977年3月シングル「レス・ザン・ゼロ」でデビュー。その後の活躍は周知の通り。

2003年12月にジャズ・シンガー、ダイアナ・クラールと結婚した後は、ジャズ・フェスなどに登場する機会も増えたが、様々なジャンルの音楽・ミュージシャンを敬愛し、その伝統を独自のスタイルで継承していくUKを代表するロック・シンガー＝エルヴィス・コストロの表現力と多彩振りに脱帽させられる。

My Aim Is True

(ビクターエンタテインメント: VICP-63491)

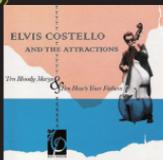
1977年の作品で、パンク～バブ・ロックのイメージを強く打ち出したエルヴィスの記念すべきデビュー・アルバム! ニック・ロウをプロデューサーに迎え、バック・バンドはヒューイ・ルイス等が在籍したアメリカのバンド、ザ・クローヴァーが担当。名バラード「アリス」も収録。



Ten Bloody Marys & Ten How's Your Fathers

(Demon: FIENDCD-27 / Import CD)

1980年にIMP RECORDSよりリリースされたデビューから1980年までに発表されたシングルB面曲や未発表曲など、オリジナル・アルバムに収録されていない曲やレア・トラックを集めたコンピレーション・アルバム。エルヴィスがウッド・ベースを爪弾くJazzyなジャケットが強い!



Spike

(ワーナーミュージック・ジャパン: WPCR-11204/5)

1989年に、ワーナー・ブラザーズ移籍第一弾としてリリースされたアルバム。「ゴッズ・コミック」やアラン・トゥーサンと共演した「ディー・ブ・ダーク・トゥルースフル・ミラー」、ポール・マッカートニーと共作した「ヴェロニカ」がシングル・ヒットを記録するなど、名曲揃いの傑作!



Beatin' The Heat / Dan Hicks & His Hot Licks

(ビクターエンタテインメント: VICP-61104)

2000年にリリースされた実に22年振りとなる「ダン・ヒックス & ホット・リックス」名義の作品。エルヴィス・コストロ、トム・ウェイツ、ブライアン・セツァーなど豪華なゲスト陣が勢揃い! エルヴィスはブライアン・セツァーと共に「ミート・ミー・オン・ザ・コーナー」に参加。



My Flame Burns Blue: Live from the North Sea Festival

(ユニバーサル: UCCH-1015)

2006年1月にリリースされたアルバムで、2004年7月9日、オランダで行われた「ノース・シー・ジャズ・フェスティバル」にて、メトロポール・オーケストラと共演したライブ音源を収めたもの。過去10年間に作り上げられた楽曲を見事なジャズ・アレンジによって蘇らせた作品!



Allen Toussaint

1938年1月14日、ニューオーリンズ生まれ。幼い頃からピアノを弾き、10代半ばからプロとして活動。50年代よりシンガー/ピアニスト/ソングライター/プロデューサーとして大活躍し、リード・シー、ジェシー・ヒル、アーマ・トーマス等を手がけたことでも有名なアメリカ南部を代表する英雄的ミュージシャン。

特に1968年ニューオーリンズで結成されたセッション・バンド、ミーターズと作り上げたニューオーリンズ・ファンクの名作の数々はもはや伝説の域。ロック界でも、ザ・バンドやリトル・フィートのホーン・アレンジを施すなど、その魔法のようなサウンドはジャンルを超えて様々なアーティスト達に影響を与えている。

The Wild Sound Of New Orleans ~The Complete 'Tousan' Sessions~ (Bear Family: BCD-15641 / Import CD)

1958~1959年にかけてレコーディングされた27曲のセッションを収録したアルバム。粋なチェック柄のジャケットに身を包んだ若かりしアラン・トゥーサンの姿もカッコいい。1曲目の「Whirlaway」から、ブギーでワイルドで骨太なニューオーリンズ・サウンドが骨髄を上げる。



Finger Poppin' & Stompin' Feet

(Capitol: Capitol-37450 / Import CD)

アラン・トゥーサンが1960~1962年にかけて「Minut Records」においてプロデューサーを担当した20曲の楽曲を集めた作品。アロン・ネルルの「オーヴァー・ユー」「レット・ライブ」、アーマ・トーマスの「クライ・オン」「イツ・レイニング」等、若きアランの偉業を再確認できる一枚。



Nightbirds / Labelle

(Epic: EK-33075 / Import CD)

アラン・トゥーサンがプロデューサーを担当し、ミーターズが演奏をサポートした女性グループ「ラベル」の1974年の大ヒット・アルバム。映画『ムーラン・ルージュ』の主題歌としてカバーされたヒットした「レディ・マーマレード」の原曲収録。70年代ファンク・ディスコの傑作!



Southern Nights

(ワーナーミュージック・ジャパン: WPCR-2592)

ミーターズをバックに従え、1975年にアラン・トゥーサンが放った大作アルバム。ザ・バンド、リトル・フィート等、多くのアーティストから敬愛されるアラン・トゥーサンの魅力がギッシリと凝縮。アランの美しいピアノの響きが最高のタイトル曲「サザン・ナイツ」は必聴!



Our New Orleans

(ワーナーミュージック・ジャパン: WPCR-12241)

2006年1月にリリースされ、アラン・トゥーサン、ドクター・ジョン、アーマ・トーマスなどニューオーリンズ出身のアーティストを中心に新録音されたベストアルバム。ライ・クーダーもプロデューサーで参加。アラン・トゥーサンは「イエス・ウィ・キャン・キャン」を披露。感動ものです!





「80年代以降から近年まで、あまり話題になる活動はしていなかったが、ニューオーリンズの音楽の歴史の中では本当に計り知れない貢献をしてきた人。プロデューサー、ミュージシャン、ピアニスト、歌手として、ニューオーリンズ音楽シーン3つの黄金時代（50年代初期、60年代、70年代前半）のそれぞれの時代を支えていたのがアランと言ってもいいと思う」と、司会のピーター・バラカンによるアラン・トゥーサンの紹介で始まったイベント。

まずは、アラン・トゥーサンがステージに登場！ その柔和な表情と落ち着いた物腰は相変わらず。「カトリナがあって、皮肉なことに活動が増えましたが…」との問いかけに、「カトリナは悲劇的に描かれていますが、我々ミュージシャンにとっては意外にもブックキング・エージェンシーや代理人のような存在になってくれた面がある。いろんなミュージシャンが集まる企画もできたし、今回のようにエルヴィスとアルバムを作れたことにも感謝している」と答えるアラン。実際のところ、アランのニューオーリンズのスタジオは、カトリナによって大打撃を受け、大切なピアノや機材、貴重な資料などがメチャメチャになってしまった。しかし、「前向きに開き直るしかない。どんなに落ちてしまおうか、何と自分で引っ張り上げるかのどちらかしかないからね」とのアランの力強いことは印象的だった。

そして、アランがピアニストとして参加したチャリティー・シングル『ALL HANDS TOGETHER』（6月7日発売）を歌うスペシャル・ゲスト、中島美嘉が紹介された。「ニューオーリンズの惨劇を見て、歌手として自分にも何か出来ないかと思い、今回のシングル・リリースを決めました」という中島美嘉。「ダメもとで」アランをお願いしたというが、「彼女の素晴らしい声を聴いて参加を決めた」というアランの反応は、彼女の歌手人生において大きな財産となった筈。アランがピアノを弾き、21人の壮大なゴスペル隊を従えての「ALL HANDS TOGETHER」熱唱に続き、同シングルのカップリング曲でもあるニューオーリンズが生んだ偉大なジャズ・トランペッター、故ルイ・アームストロングの「What a Wonderful World」がしっとりとした美声で歌われ、アランの哀愁あるピアノのイントロにもゾクゾクさせられた。しかし、ニューオーリンズのルイ・アームストロング・パークにあったサッチモの銅像はどうなってしまったのだろうか…。

そして、「川を逆流させる」という意味を持つ2人の入魂のコラボ「ザ・リヴァース・イン・リヴァース」誕生までの共演過程を説明するピーター・バラカンの声をかき消すかのように、割れんばかりの大拍手の中、いよいよエルヴィス・コストロが登場！ ダイアナ・クワールとの結婚生活を物語る幾分ふくらと恰幅の良さを感じさせるコストロ。サングラスにヒョウ柄の靴も印象的だったが、ふとした瞬間にジョー・ストラマーやブルース・スプリングスティーンの面影を抱いてしまったのは自分だけだろうか。

1曲目に披露した「ザ・シャープベスト・ソーン」。ギターは手にせず、マイク・スタンドを握っての熱唱！ 後半にはステージを降りて客席にコーラスを促した。それにしても凄い声量！ これが正真正銘、本物のシンガーなのだと思えた。歌い終えた後に「beautiful but quiet!」と客席に向かいエルヴィスが叫びたが、あまりの迫力とその存在感に客席全体が圧倒されていたのは間違いない。そして、アランのピアノの響きも印象深く、2人の共演のきっかけもなった曲「フリーダム・フォー・ザ・スタリオン」へと続く。「最初はアラン・トゥーサンのソングブックというような企画を考えていたが、そのようなものを作り出したらとても1枚のCDに収まるどころじゃなく6-7枚になりかねない。でも、結局アルバムに収まらない曲も出てきた。最初はお互いに遠慮し合ってなかなか巧く進まなかったんだけど、始まったら様々なアイデアが浮かんで来て、曲がどんどん出来たんだ」というレコーディング時のエピソードも披露してくれた。3曲目は、アルバム未収録でDVDの中で披露されている「ホワット・ドウ・ユー・ウォント・ザ・ガール・トゥ・ドウ」。

【スペシャルショーケース セット・リスト】

2006.05.31 @ キリスト品川教会「GLORIA CHAPEL」

【中島美嘉&アラン・トゥーサン】

- ① オール・ハンズ・トゥゲザー
- ② ホワット・ア・ワンダフル・ワールド

【エルヴィス・コストロ&アラン・トゥーサン】

- ① ザ・シャープベスト・ソーン
- ② フリーダム・フォー・ザ・スタリオン
- ③ ホワット・ドウ・ユー・ウォント・ザ・ガール・トゥ・ドウ
- ④ ザ・リヴァー・イン・リヴァース
- ⑤ アセンション・デイ
- ⑥ フーズ・ゴナ・ヘルプ・ブラザー・ゲット・ファーザー?
- ⑦ ニアラー・トゥ・ユー
- ⑧ ワンダー・ウーマン

＜アンコール＞

- ① インターナショナル・エコー
- ② ザ・グレイテスト・ラヴ
- ③ イェス・ウィ・キャン





2人のハモリが本当に美しい。続いて、このライブで唯一エルヴィスがギターを弾いたタイトル曲の「ザ・リヴァー・イン・リヴァース」。赤いライティングに映える2人の背後にそびえる十字架を見て、改めてここがチャペルであることに気付かされた。「アセンション・デイ」を歌い終えた後に、エルヴィスが「ドウモアリガトウ」と日本語を披露。アラン作曲の「フーズ・ゴナ・ヘルプ・ブラザー・ゲット・ファーザー？」は、アルバム収録曲の中でも大好きなナンバー。「yeah!」「…ding-dong」「…ding long」と繰り返される掛け合いは今でも耳に残っている。僅か2メートル程の至近距離まで近づき、説得力溢れる歌声でエルヴィスが歌う「ニアー・トゥ・ユー」には鳥肌が立った。これもアラン作曲の名曲。そして、客席と共に手拍子を打ちながら歌った「ワンダー・ウーマン」であっという間にステージが終了。2人のインタビューとなった。

長年プロデューサーとしても様々なレコーディングに関わってきたアランだが、「今回はジョー・ヘンリーがプロデュースを担当することで、状況的に難しくはなかったか」との質問に対し、アランは「彼は素晴らしいプロデューサーで、とてもやりやすかった。『ジェントルマン・プロデューサー』と呼んでいるんですが、彼の心から音楽を愛する気持ちとその仕事振りが本当に素晴らしい」と答えた。一方、エルヴィスにとってジョー・ヘンリーと仕事するのは今回初めてだったが、「今回はプロデューサーにはオノ・ヨーコがいいか、ジョー・ヘンリーがいいか迷った…」と軽いジョークも飛ばしてくれたが、カトリナ被害に対する米国政府の対応に関しては、「タイフーンの後の連邦政府の対応は遅かったし、人間味が欠けていたというのは明らかだった。そんな今の社会の流れが変わる様に、思いやりや社会全体そのものを考える姿勢が重要…」とのコメントには、会場からも大きな拍手が沸き起こった。

そして、誰もがこのインタビューでショーも終わりかと感じたのも束の間、ピーター・バラカンのひと声でアンコールを快く受けるエルヴィス。どこか気難しそうな印象があったが、生粋のミュージシャン気質とエンタテイナー精神を持った偉大なアーティストなのだと痛感。更に、1曲だけのアンコールだと思いきや、何と「インターナショナル・エコー」「ザ・グレイテスト・ラヴ」「イエス・ウィ・キャン」と3曲も披露。勿論、客席は総立ち！ 教会で本物のゴスペルでも聴いているかの様な錯覚に陥るほどの盛り上がりませ、スペシャルショーケースが終了した。

この6月の時点でニューオーリンズのライブ・ハウスの約7割が営業を再開したというが、被災時からほとんど状況が変わらない地区もまだあるという。しかし、エルヴィス・コストロやアラン・トゥーサンをはじめとする大勢のミュージシャン達のパワー、そして、音楽の街&ジャズ発祥の地ニューオーリンズに音楽が鳴り響く限り、必ずや復活を遂げるであろう。そして、一日も早い復興を心から願いたい。



エルヴィス & アラン入魂のコラボレーション!

ニューオーリンズを襲ったハリケーンによる惨劇へのレクイエムとして立ち上がった世紀のプロジェクト!
初回生産限定盤にのみ
ボーナスDVD付き!
全音楽ファン必携の1枚!



ザ・リヴァー・イン・リヴァース
エルヴィス・コストロ&アラン・トゥーサン
ユニバーサル: UCCB-9011
¥2,800 (tax in) Now On Sale!
【P10のジャズ新譜紹介コーナーもご覧下さい】